令和４年7月26日

News Release

福岡アジア美術館アーティスト・イン・レジデンス事業
発表記者会見

FaN Fukuoka Art Next

7月26日15時　福岡アジア美術館7階アートカフェ

●出席者

レジデンスアーティスト：イ・ビョンチャン氏、リーロイ・ニュー氏、長野櫻子氏

大学関係者：牧野豊准教授（九州大学芸術工学研究院）

ロバート・プラット教授（九州産業大学芸術学部）

福岡アジア美術館：吉田宏幸（経済観光文化局理事）

岩永悦子（館長）、山口洋三（学芸課長）、中尾智路（交流・教育係長）

①　第Ⅰ期アーティストが来日しました

・イ・ビョンチャン氏（韓国、1987年生まれ）
・リーロイ・ニュー氏（フィリピン、1986年生まれ）
＊7月下旬から10月までの90日間、アジア美術館交流スタジオを拠点に制作。9月開幕のFaN Weekにて、お寺等で作品を展示します。

詳細は、別紙資料2-3頁をご覧ください。またモニタにてアーテストを紹介します。

イ・ビョンチャンさん、リーロイ・ニューさんを紹介します。今回の滞在制作に関して抱負をうかがいます。

②　第II，III期アーティストが決定しました

国内外からの応募総数312組から選考の末、以下の6組をレジデンスアーティストとして招聘します。8月下旬に開設されるArtist Café Fukuoka（旧舞鶴中学校校舎）のスタジオを拠点に制作。

・II期（9-12月）：大西康明（日本）、ソー・ソウエン（福岡）、ケン・ジェシェン（台湾）
・III期（来年1-3月）：下寺孝典（日本）、長野櫻子（福岡）、ドクペルー（ペルー）
＊福岡市在住の長野櫻子さんの紹介。抱負を語っていただく。

詳細は、別紙資料の4頁以降をご覧ください。またモニタにてアーティストを紹介します。
レジデンスアーティストの1人である長野櫻子さんを紹介します。今回のレジデンスアーティスト決定について抱負をうかがいます。

③　市民の交流、制作への参加の機会があります。

レジデンスアーティストは、滞在期間中、自身の制作をする一方で、一般市民、学生らが参加できるワークショップ、レクチャーなどを行う予定です。また一般市民の皆さんが参加することで制作される場合もあります。制作した作品は、 Artist Café Fukuoka内のギャラリー等で展示します。

④　レジデンス事業大学と連携します

九州大学、九州産業大学と文書を交わして連携をはかり、アーティスト・イン・レジデンス事業に参加するアーティストの成長支援に取り組みます。
・レジデンスアーティストの選考への協力
・各大学との連携アーティストの選考
・アーティストが制作活動を行う際の助言など技術・内容面での協力、大学設備の提供
・その他、必要に応じて、アーティストのワークショップやレクチャーなどを大学内もしくはアーティストカフェで共同開催

九州大学芸術工学研究院准教授の牧野豊先生、九州産業大学芸術学部教授のロバート・プラット先生を紹介します。アーティスト・イン・レジデンス事業に対する期待をうかがいます。

【問い合せ先】
福岡アジア美術館　学芸課　交流・教育係
TEL　092-263-1106　担当：山口、中尾

福岡アジア美術館
アーティスト・イン・レジデンス事業
令和4年7月26日記者発表資料

第 I 期アーティスト資料　　1-2頁

第II, III期アーティスト一覧　3頁

第II, III期アーティスト資料　4-9頁

福岡アジア美術館

イ・ビョンチャン
Lee Byungchan

男性　1987年生まれ
韓国・ソウル在住
2015年仁川カトリックアート＆デザイン大学院、都市環境彫刻修了
2021年個展「Underground Standard Atmospheric Pressure」（ソウル）

廃棄ビニールを素材に、都市にうごめく新・生命体のインスタレーションを制作。

都市の消費生活で日々大量に廃棄され、環境汚染や生態系の破壊などを引き起こしているビニールやプラスチックなどの素材を用いる。それらに精神性を見い出し、命を吹き込むがごとく発光させ動かすことによって新たな生命体や生態系を創り出し、都市の中に奇妙で幻想的な風景を生み出す大型インスタレーションを発表。近年は「平昌ビエンナーレ」（2017年）や「自然・生命・人間」展（釜山現代美術館、2019年）ほかに参加し、日本では今回が初めての作品発表となる。

海外 1期

リーロイ・ニュー
Leeroy New

男性　1986年生まれ
フィリピン・マニラ在住
2007年フィリピン大学芸術学部卒業
2022年個展「The Arks of Gimokudan」（ロンドン）
2022年個展「Mebuyan's Colony」（フィリピン）

ネオンのような蛍光色を用いて、都市に浮遊するような巨大インスタレーションをつくりだす。

美術のみならず映画やミュージックビデオ、ファッションの世界でも活躍するアーティスト。

フィリピンの街中に見られるネオンのような蛍光色を用いて、都市の中に巨大なインスタレーションを出現させたり、深海や宇宙の生命体を思わせるコスチュームを身にまとったキャラクターがパフォーマンスを演じるなど、多彩な作品を展開。「第4回福岡アジア美術トリエンナーレ2009」では、福岡アジア美術館の入口に大型の彫刻展示をおこなった。今回は10年ぶりに福岡で滞在制作する。

第II期、第III期レジデンスアーティスト

312組の応募から、下記のとおり6組を選考した。

分類	氏名	生年	性別	国籍 在住地
第II期	2022年9月～12月滞在（90日間）			
日本	おおにしやすあき 大西康明	1979	男性	日本 大阪府
福岡	ソー・ソウエン	1995	男性	日本 北九州市
海外	ケン・ジェシェン Keng Chieh-Sheng	1989	男性	台湾 台北
第III期	2023年1月～3月滞在（60日間）			
日本	しもでらたかのり 下寺孝典	1994	男性	日本 大阪市
福岡	ながのさくらこ 長野櫻子	1989	女性	日本 福岡市
海外	ドクペルー （ホセ・バラド & ヒメナ・モーラ） Docuperu (Jose Balado & Jimena Mora)	1961 1979	男性 女性	ペルー リマ

大西　康明
Onishi Yasuaki

男性　1979年生まれ
大阪府富田林市在住
2004年京都市立芸術大学大学院修了
2011年ポーラ財団在外研修員として英国滞在
2014年福岡市美術館特別展「想像しなおし」出品

日常の素材を用いて空間を作り出すインスタレーションを制作。

近年、新しく銅箔を用いて河原をトレースする「石と柵」という作品を発表。ダムや外来植物によって河原が少なくなっていることこの制作や作業を通して実感した。レジデンスでは、福岡県内の河川に取材。単純に自然環境の破壊を訴えるものではなく、作品「石と柵」から更に展開し川と人との関わりをテーマにした制作を考えている。

銅箔を使って石や木などの有機的なものや容器などの身の周りのものを型取り、はんだ付けなどの接着で造形物を制作するワークショップを計画。

ソー・ソウエン
Soh Souen

男性　1995年生まれ
北九州市在住
2019年京都精華大学卒業
2020年個展「ささやかな叫び」（東京）
2022年小内光と二人展（蔦屋書店、東京）

肖像写真からドットのみを抽出した絵画、自らの体の輪郭をかたどった絵画等を制作。

自分のアイデンティティーが何によって成り立っているかを、自らの身体との関わりにおいて追究している。

本レジデンスでは、人の出生（個としての生の始まり）と深く関わりのある“お臍”と“呼吸”に着目した制作を行う。映像インスタレーション、パフォーマンスを制作し、「わたし」や「わたしたち」の性質について考察したいと考えている。映像のモデルとなって下さる方々や、パフォーマンスに参加して下さる方を福岡の市民の方から募集をする。

ケン・ジェシェン
Keng Chieh-Sheng

男性　1989年生まれ
台湾・台北在住
2016年交換プログラムで多摩美術大学で学ぶ
2019年台湾国立芸術大学大学院修了

台湾を含む東アジアの人間の習慣と身体に注目してオブジェを制作。

本レジデンスでは、アジア美術館の存在する地域がかつて海だったことに注目し、地域のリサーチを通して日本の干拓や水上置換の概念や物語を見出したい。その上で制作するインスタレーションは、文化的言語、記憶、身体、環境を結びつけ、人間の活動がどのように関連しているかを示すだろう。

下寺　孝典
Shimodera Tananori

男性　1994年生まれ
大阪市在住
2019年京都芸術大学大学院修了
（修了展で浅田彰賞受賞）
2019年片岡真実キュレーション
「KUAD ANNUAL2019 宇宙船地球号」
（東京都美術館）

東南アジアの都市でみられる移動式屋台のリサーチ結果から作品を制作。

レジデンスでは、現在失われつつある福岡の屋台を中心としたまちの風景を社会学や都市史の研究を行う専門家に知見を借りながらにフィールドワーク調査をし、それをまとめたインスタレーション作品として発表する。

また、博多のまちを探検し、参加者がまちの不思議なもの、面白い風景を記録し、参加者各々で設定したテーマに沿い、共同でその写真をコラージュの用法で再構成するワークショップを計画。

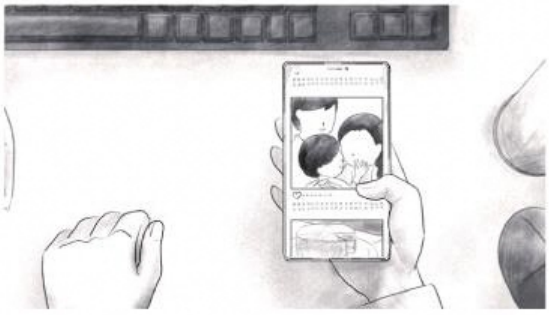
長野　櫻子
Nagano Sakurako

女性　1989年生まれ
福岡市在住
2016年広島市立大学芸術学研究科修了
2018年～情報科学芸術大学院大学メディア表現学科 入学（2022年現在 在籍中）
2022年個展（福岡市、エウレカ）

自己と他者の関係を主題とし、展示する場所の特性を活かした映像作品を制作。

レジデンスではドキュメンタリー・アニメーションを制作する。新型コロナウイルスの影響により社会から孤立した人たちの孤独に焦点を当て、インタビューを行うことで、私たちに会った確かな過去の記録を図るとともに、鑑賞者それぞれに寄りそう作品の制作を行う。

ワークショップでは、スマホを使ったストップモーションアニメーション制作を行う予定。



ドクペルー
Ducuperu

（ホセ・バラドとヒメナ・モーラ）

男性　1961年生まれ
女性　1979年生まれ
ペルー・リマ在住
2003年グループ結成
2012年よりUPC （ペルー）および TEC MX（メキシコ）教授（ホセ）
2015年よりUPC and PUCP大学教授（ヒメナ）

地域の人々、歴史に密着したドキュメンタリー映画を制作。

4本の短編ドキュメンタリーの制作を通して、福岡市に存在する様々な記憶、人物、伝統、慣習の正当性を証明することを目的とする。

このプロジェクトは、参加型の共同ワークショップを通して、設立から20年、ペルーや他のラテンアメリカ諸国で350本以上のドキュメンタリーを制作してきた私たちが開発した方法論を、福岡市の映画、メディア研究、視覚芸術を学ぶ若い学生たちに伝える。